
続とらドラ！

不幸男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続とらドラ！

【Nコード】

N6350X

【作者名】

不幸男

【あらすじ】

えゝこれ俺がやんのゝ？めんどくさいなーもー、って、わかった、わかったって！！頼むからその木刀しまくれよ、タイガー。えーと、あ、俺、春田でゝす。えーこの作品は？アニメのラストから5年後の話です。アニメの話をベースとして作っているのでアニメの方を見てたがいかもです。まあ内容知ってれば見てなくても大丈夫だよ。ほーらこれでいいんだろ？やればできるじゃん俺…って痛ったあーなんで殴んのさあ、ちゃんとやっ…痛たたたたすいませんでした。もうなんかわかんないけどすいませんでした！！許し

てくださーい！！！！

第1話「虎と竜、再び!!」その壱（前書き）

ども、不幸男です。

初投稿です。文法ミス、誤字脱字、キャラ崩壊は大目に見てもらえるとありがたいです！

ただの妄想ストーリーですが楽しんでいただけたら嬉しいです!!

第1話「虎と竜、再び!!」その壱

俺たちの卒業から5年。

未だに俺たちが打ち立てた2 - C完全優勝の記録は破られていないらしい。

俺、高須竜児は現在、俺、大河、泰子の3人家族。

そして今月末には4人家族になる予定である。

こつという話をするのろけ話だと思われてしまいが今はとても幸せだ。

俺は大学で栄養学を専攻し、卒業後は在学中にアルバイトで貯めたお金で（とは言っても、大河と仲直りした逢坂父からのお金が8割を超えているが）念願だったこの【ドラゴン食堂】を立てることが出来た。

ちなみに食堂の奥が家となっている。

しかも二階建てだ！

大河は店員として（とはいっても、あんまり働かねーし、たまに働くかと思えば、料理を落とすしこぼすし……という有様だが）、俺はコックとして働いている。

まあついでだが大学卒業後、行く当てがなかった春田を拾って働かせてやっていることも紹介しておこう。

本当についでだけど。

そして今日、その春田はというと、書きたいことがあると言って休みである。

春田は文化祭で書いたプロレスショーのシナリオが大ウケしたことで味をしめ、それから小説を書くことが趣味になったようだった。

たびたび小説を書いてはクラスメイトに見せて感想を求めている姿は今でも覚えている。

正直、内容はそこまで面白くない。

しかし嬉々として小説を見せてくるので面と向かって面白くないと言えないのである。

それがよくなかったらしく、今では、よく作家を気取って勝手に3日くらい休んだりする。

そのたびに店員の人数が足りなくなったりするので店としてはかなり迷惑な奴だ。

まあ春田の迷惑伝説を挙げるときりがないのでこのあたりにしておこう……。

とりあえずみんなは幸せに……

「りゅーじー！りゅーじー！オーダーはいったよ！」

俺がいる厨房に向かって、かなり大きな声で叫ぶ大河。

まったく人が折角思い出に浸っているのに邪魔しやがって。

大河は今珍しく注文をとりについている。

しかし大河のお腹は結構大きく膨らんでおり、もう働くには相当きつい体であることは明白だった。

「馬鹿野郎！お前はでなくていいっていったらろうが！妊婦はおとなしく寝てろよ！」

こちらもタラコスパゲッティー を仕上げながら大きな声で言い返す。

「この駄犬！今日は春田が休みなんだから人数たりないでしょっ！しかも日曜日のお昼よ！お・ひ・る！あいつがいてもたりないわよ！」

大河がドカドカと機嫌が悪そうに……訂正、機嫌悪く、厨房の方に入ってきた。

「昼からは櫛枝が手伝いに来てもらえることになってんだよ。あいつのバイトテクは半端ないからな。何とか乗り切れるだろ？」

櫛枝に絶対的な信頼をおく高須竜児であった。

なんて思いつつタラコスパゲッティー を作り上げる。

あいつの食器洗いの技術はかなりのものだ。

その上、人一倍働くから本当に助かる。

本格的に雇うことを考えようか……？

ちなみに櫛枝は今、幼稚園の先生をしている。

「ならいいけど……」

俺の気遣いが少し照れくさかったのか、俯きながら大河は答えた。

ゆっくりとした足取りで店の奥に歩いていく。

「腹だして寝るなよ」

こっちも若干、恥ずかしくなったので少しだけ意地悪をした。

「バカ！」

思いつきりドアをしめる大河。

俺の見間違いかもしれないが顔の色が明太子のように赤くなっていたのが見えた。

タラコスパゲッティの作りすぎだな。うん。

「あ、そういえば竜児」

大河はひょいとドアから顔を出した
まだ居たのかよ。

「今日の2 Cの同窓会、またウチでやるんでしょ？ちゃんと準備しときなさいよ。じゃあ私、寝るから……」

.....。

やべー。

本気で忘れてた。

現在、午後8：00。

元2 - C同窓会開始。

もちろん元失恋大明神こと、北村の仕切りでこの同窓会は始まる。

「えー今回、ご多忙の中お集まりくださりありがとうございます。今日は雲一つない青空の中……」

空はお世辞にも晴れとは言えない曇り空だった。

もちろん夜の8時に青空が見えるわけもなかった。

そしてなぜこいつは体育祭の開会式で行われる『校長先生のあいさつ』みたいなしゃべり方をするのだろうか。

激しく長くなりそうだった。

「そんなご託はいいからさ、始めようぜ」

ナイス能登！

高校時代からメガネ以外変わっていない事で有名な能登がビールの入ったグラスを高らかに上げ訴えた。

ちなみに眼鏡の変化も色が赤に変わったただけだ。

そんなんだから地味キャラって呼ばれるんだよ……。

「うむ、そうだな。こないいい日に長々と話すのも無粋だな。よし。では省略して……さあ、今日いう日を盛大に楽しもうではないか！ 乾杯！」

「乾杯！」

北村の号令とともに馬鹿騒ぎが始まった。

どんなに時がたって、こうやって集まれば馬鹿騒ぎができるのは
2 Cのいいところかもしれない。

いや悪いとこなのか？

「料理はあまるほどあるからな。じゃんじゃん食えよ」

もちろん誰も聞いていない。

まあそれ程、重要なことでもないのですそのままいつもの席に座った。

チビチビとビールを飲みながら会話に耳を傾ける。

「ちょっとわざわざ撮影全部キャンセルして来たのに私が1番早くつくってどういうこと?」

今や一大女優となった川嶋がジョッキ片手に怪訝そうな顔で訴える。

それはお前が一番楽しみにしていたからだろう…?とは口が裂けても言えない。

「ハハハー! あーみんらしいねっ!」

さわやかに、そして朗らかに、昔と変わらぬ顔で笑う櫛枝。

「なんだとこの脳細胞筋肉バカ!」

売れっ子女優がこんな口をきいていいのか。

……まあだめだろう。

こんなやって喧嘩してるけど、こいつら月に3回も遊びにいつてるから仲はいいんだよな。

罵声というミサイルを櫛枝に撃ち続ける川嶋。

ていうかコイツ飲みすぎだろ。

何杯目だよ……。

「ほらほら亜美ちゃんおさえて、おさえて」

未だにギャルを卒業できていない木原が止めに入った。

もちろんこんなことで川嶋のミサイルが止まるはずがなく、

「あゝあ。麻耶ちゃんはいいいよねー。彼氏がいて」

とあえて大きな声で木原に言った。

同時に木原の肩がぴくつとはねる。

「な、なんでそんなところに話が飛ぶの！」

木原は手をバタバタと振り川嶋の言葉を止めようとするが、川嶋はそんなことお構いなしにミサイルを撃ち続ける。

「今日も能登くんと、お・て・て、繋いで来たもんねー。あゝ羨ましいわゝ」

「え……？」

凍りつく2 C 一同。

3秒の沈黙を置いて叫び声があがる。

「えゝあの麻耶ちゃんが……？」

「嘘でしょ？ねえ嘘って言って！」

「クソッ。俺、木原の事好きだったのに……！」

「おいおい幸せ振りまいてんじゃねーよ！ー！！」

「リア充爆死しろ」

「ブツ殺ス……能登」

「ちょっとタウンページで殺し屋の電話番号調べてくる」

「ちょっと待て。」

最後の方、発想危なすぎだろ。

あと一応断っておくがタウンページに殺し屋のってないから。

「あああ亜美ちゃん！？まさか見てたの？」

能登が尋常じゃないほどの汗をかきながら川嶋を見る。

しかし川嶋は

「うえー。本当だったの」

と、とどめを刺した。

もうミサイルじゃねえ。

ナパーム弾だろ。

「亜美ちゃん！もうこれ以上なにもいわないで！」

木原が半泣きになったところで川嶋のミサイルもとい、ナパーム攻撃は終了した。

しかし酒がはいった川嶋は誰にも止められない。

これ以上、撃墜者を増やすなよ……。

「それに祐作、あんた何、会長と2人も子供を拵えちゃってるのよ。しかも双子。」

こちらはみんなすでに知っている事実である。

北村はアメリカまで会長を追いかけて、見事会長のハートを射止めたのであった。

今は会長と2人でスーパーかのお屋を営んでいる。

もちろん俺はお得意さんだ。

しかし顔なじみだからといって代金をまけてくれたりしないところが会長らしい。

「ハッハッハッハ！ちなみに10人まで作る予定だぞ。」

10人って……やりすぎだろ。（別にいやらしい意味ではない。）

そのまま川嶋は小さい頃の北村の恥ずかしいエピソードを語り始める。

ミサイル艦は次なる標的として北村を選んだようだ。

普通の人ならば恥ずかしすぎて次の日寝込むほどのレベルの話を北村は笑って済ませる。

北村の器のでかさを思い知った瞬間だった。

ただ恥ずかしいという感情がないだけかもしれないが……。

ていうか、北村……お前……そんなことをしてたのかよ。

「子供と言えば、たかつちゃん。今月末には産まれるって本当？」

ここに来て春田が俺に話を振ってきた。

お前はここに働きに来てんだから知ってるだろ。

完全に酔ってるな、コイツ。

ていうかコイツ今日、休んだこと謝る気ゼロだろ。

「お、おう。女の子だ。」

「そっかそっか。良かったねえ、たかつちゃん！」

だからお前は知ってたんだろうが。

まったく、アホみたいな声だしやがって……あ、アホか。

「名前は決まってるの？」

ダメージを全く受けない北村に飽きたのか川嶋が会話に参加してきた。

「ああ。明暗の『明』にうさぎの『兎』で明兎^{みんと}で名前だ。玉兎^{みんと}って漢文では『月』って意味で月のように暗い場所でも明るく輝ける子になりますように・・・と思って」

「……高須くんにしては、いい名前、つけたじゃない。」

川嶋がミサイル攻撃中からは想像できないような優しげな眼差しを俺に向けた。

「たしかに考えたのは俺だけど、『月』っていう発想はお前から取ったんだぞ。昔、俺の事、月だって言ってたろ。だからお前も名付け親みたいなもんだな」

「は、はあ？そんな名付け親とかいわねーし。亜美ちゃんにそんな役、押しつけんなっての」

視線を右に流す川嶋。

毒づいているが、照れているらしい。

「大きくなったらウチの幼稚園に入れてね！」

川嶋の横から櫛枝がビシッと親指を立てる。

「おう！櫛枝なら安心だ。」

またもや櫛枝に絶対的な信頼をおく高須竜児であった。

「ふふふ。絶対、最強のフレイムヘイズに育ててみせるぜい」

「いや、正直、それは遠慮したい……」

「あ、そう？あとさ、大河の姿が見えないんだけど、どこにいるの？」

櫛枝は周りを見渡し、高校時代からの親友を探す。

「ああ。昼からずっと寝かせてる。そうだな、そろそろ起こすか。」

俺はゆっくり立ち上がり、店の奥へと向かう。

「フフフ。」

なぜか笑みをこぼす櫛枝。

「うお？どうした櫛枝？」

「いやーごめん、ごめん。あまりにも高須くんがとってもいい夫に見えたから、さ。」

櫛枝がそう言った瞬間、胸の大きく脈打つのが分かった。

「いや……そうでもねえよ。」

俺は大河を起こしに行きながらさっきの言葉について考えていた。

夫……。

結婚してからずいぶん経ったが、『夫』と呼ばれるのは未だにない。

その響きになれないまま『夫』から『父親』に変わるのだろうか。

実際にミントが産まれれば形式的には『父親』になるのだろうか。

だが俺は大河の『夫』として何かしてあげられただろうか。

俺はミントの『父親』として何かしてあげられるだろうか。

俺は『父親』を知らない。

顔は知っている。

でも俺は普通の家庭のように『父親』と一緒に過ごしたことはない。

そんな奴がいい『父親』になれるだろうか。

俺は、俺の家族を幸せにしてあげられるだろうか。

俺は今、幸せだ。

これははっきりと言える。

でも大河は？

大河は俺と結婚して、俺が『夫』になって、幸せだっただろうか。

これまで大河には多く迷惑をかけてきた。

今日だってお腹が大きくなって動くのだけでも苦しいはずなのに店の手伝いをさせてしまった。

俺は……こんな『夫』のままでいいのだろうか。
このまま『父親』に、なってもいいのだろうか。

気づくと俺はすでに大河の部屋の前に到着していた。

楽しい同窓会にこんな暗い考えをしておいてはだめだな、と考え心の奥に引っ込める。

とりあえずノックして大河の部屋に入った。

第1話「虎と竜、再び!」その巻（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

この1話は3つに分かれているので最後まで付き合ってもらえるとうれしいです。

第1話「虎と竜、再び!」その弐(前書き)

その2です

なんか竜児とかキャラ崩壊してね?

とか思う今日この頃。

第1話「虎と竜、再び!!」その貳

大河はやはりと言っべきか、見事にお腹をだして寝ていた。

「まったく……」

ちゃんと腹だして寝るなって言ったのに。

呆れながらも俺の顔はほころんでしまった。

いつも通りの大河になぜだか安心してしまう。

幸せそうな顔しやがって。

さっきまで悩んでいた自分が馬鹿に思えてくる。

しかしいつまでも寝顔を見つめているわけにはいかない。

体をゆすって起こそうとするが大河はなかなか起きなかった。

相当、熟睡しているらしい。

「おい大河、もう同窓会始まってぞ」

「う、うん……。竜児の…竜児の…耳の穴から米が…米が、ほかほかの銀シャリが…」

どっかで聞いたことがあるようなフレーズだった。

ていうか耳から米って………どういう状況だよ。

俺はそんなびっくり人間になった覚えはねえぞ。

「そんなこと言っていないで早く来いよ。あ、ちゃんと顔洗ってくるんだぞ」

「うるさい、この、バカ犬……」

寝起きのため、罵声に勢いが無い。

本当に寝起き弱いな、コイツ。

「ちゃんと来いよ。みんな待ってるんだから」

それだけ言って大河の部屋を出た。

ちゃんと起きたかどうかは疑問だがこれ以上はやめておいた方が良
いだろう。

これ以上やると殴る、蹴るなどの武力行使をされそうだ。

実際に前、寝ぼけて北村を殴ったこともあるしな。

いや、あの時は牛乳を飲んだ顔を近づけた北村が悪かったのか？

まあそんなことはどうでもいいんだけどな。

俺が同窓会の席に戻って十五分後、大河も頭をボリボリと掻きながらやってきた。

それはもうTHE寝起きみたいな感じでだ。

「ふわあああ。竜児、私の分のご飯、ちゃんと取ってあるんでしょうね」

来ていきなりそれかよ。

まずは久しぶりに会ったクラスメイトとかにあいさつとかするだろ、普通。

一応、お前、クラスで結構人気者だったんだからさ……。

そんなことを思いつつも、こうなることを見越してしっかりと大河の分は別に取っておいたのであった。

俺は腰を上げ、大河の食事を取りに行こうとする。

しかし、

「うおおおお、大河あああああ！！」

という、まるで天の川によって離れ離れになった織姫と彦星が一年ぶりに出会ったときに発するような叫び声が聞こえた。

あくまで俺のイメージだが。

別に俺の中で織姫と彦星のイメージが悪いわけじゃないぞ。

声がした方へふり返ってみるがそこには誰もいない。

そして俺の目の前を走りぬける奴がいた。

その姿はまるで赤い彗星……。

「うおおおお、大河ああ会いたかったよおおお。」

赤い彗星の後をたどり、もう一度大河に目をやるとそこには大河に抱きつく櫛枝実乃梨の姿があった。

「み、みのりん落ち着いて……って、うわっ酒臭っ！」

「うおおおお、大河ああ元気にしてたかあ??コイツめええええ!!」

いやお前、結構な頻度で店に来てるだろ。

ワシャワシャと大河の髪をなでる櫛枝。

その顔は彼女の髪の色とタメをはれるほど赤く染まっていた。

俺はゆっくりと後ろを向く。

そして今まで櫛枝が座っていた席を見る。

何本もの瓶ビール（もちろん空）がテーブルの上に散乱し、その暴飲に付き合わされたであろう春田のかわいそうな亡骸が横たわっていた。

「おい、櫛枝、お前いつの間にこんだけの量、飲んだんだよ。それにあんまり、」

「黙らっしやいっ！！大河は今私の物なのれすのよ！！いくら高須くんでも私と大河のめくるめくめくめくるんランデブーのお時間を邪魔する権利はおありににやらくつてよ！！」

「いや、もう何言ってるかわかんねえよ。しかも呂律も回ってねえ」
明らかに酔っている。

いつものネタに磨きがかかっている。

ていうか意味のわからなさがはんばない。

支離滅裂だ。

そしてお前はあんまりにゃんにゃん言わない方がいい。

黒櫛枝とか呼ばれるぞ。

「いゝから酒を持ってくるのじゃー！ー！今日は祭りじゃー！がつははははー！」

「よーしそれじゃあ今日は飲みまくろー！まずはやっちゃんからいきまーす！ー！」

……………。

おい。

ちょっと待て。

今、元2 Cじゃない奴がいなかったか？

「泰子、お前今日仕事は？あるって言っただけだったか？」

「そー思っただけどー、なんかなかったぽいんだよねー。魅羅乃ちゃんは今日入ってないよーで、店長が」

「で、早々に帰ってきたわけだ」

「うん、そーいうことなのです！じゃあみんな飲もー飲もー！」

「だめだ、展開が速すぎてついていけねえ……」

それから何故か合流した泰子が元2 Cの男たちと飲み比べをして男たちを潰していった。

もちろん超ハイテンション（わりといつもだが）の櫛枝も酔い潰れるまで暴走し、男女問わず、からみ続けた。

泰子の男殺しと櫛枝の暴走で我が食堂には大量の屍だらけという大惨事になってしまった。

櫛枝が酔い潰れたあたりで同窓会はお開きとなり、元2 Cのメンバーはパラパラと帰っていく。

「じゃあたかつちゃん。また明日ー！」

最後の客、春田を見送る俺と大河。

「お前、酒とか飲んでないだろうな？」

「バカね！私がそんなことすると思ってるの？飲んでたら暴れてるわよ」

「それもそうだな。」

俺が大河と一緒に酒を飲んだ時の事だ。

大河は酔っ払い、暴れまわって一緒に飲んでいた俺はボコボコにされた。

それは例えるならば地獄……

ていつか地獄よりひどかった。

あんな惨劇は二度と起こしてはならない。

「一応聞いたんだよ。この子に悪影響だからな」

そう言っ俺は大河のお腹を優しく撫でる。

「ちよっ、何、いきなり触ってんのよ！！このエロ犬！！」

そう俺に罵声を浴びせていてそっぽを向く大河。

しかし店の窓に反射した大河の口元はかなり緩んでいた。

やはり大河も嬉しいのだ。

もちろん俺も嬉しかった。

大河のお腹の中には新しい命が宿っている。

俺と大河との子の命が。

それを考えるだけで俺は幸せな気分になってしまっ

ただと幸せすぎて……

幸せすぎて……怖い。

こんなに幸せでいいのだろうか？

これが一時の幸せのよう……

この後起こる不幸を暗示しているよう……

そう思いながらそつと後ろから抱きついた。

「ななななな何すんのよ！」

「寒いだろ？暖めてやろうと思って」

即座に嘘をつく俺。

嘘と料理の腕だけはこの5年で急成長したようだ。

でも酔っ払ってないと出来ないな、こんなこと。

「……バカ」

大河は抵抗せず俺の腕の中に収まってくれる。

小刻みに震えている俺の腕に気付いたようだった。

幸せすぎて怖いなんて贅沢な悩みだと自分でも思う。

不安を感じることもなんて何ひとつないのに……

不安がこみ上げて目からこぼれ落ちそうになる。

我慢するために空を見上げた。

昔、大河と一緒に見上げた星空だ

「大河、北斗七星。あれがポラー、オリオン……」

あの時と同じように正座をなぞる。

「どこ？オリオン座」

あの時とは違い、はっきりした声が聞こえる。

正座は時期さえ合わせれば時間がたっても全く同じ正座を見ることが

が出来る。

でも人間はそうはいかない。

人間は常に変化していく。

もちろん人間関係も。

あの時は二人同じ場所で違う人を想っていた。

1年後は二人違う場所でお互いの事を想っていた。

今は二人同じ場所でお互いの事を想っている。

「来年は俺と大河とミントの三人で…この星を見ような」

言おうと思って出た言葉ではなかった。

自然に出た言葉。

心からの言葉だった。

俺は大河の方へ視線を落とす。

大河の目には俺が映っていた。

「……うん」

大河も頷く。

少しの沈黙が続き、俺たちは静かに唇を重ねた。

第1話「虎と竜、再び!」その弐(後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございます。

次で1話終わりますですございます。

2は結構ギャグが多かったです、3はシリアス重視ですかね。

第1話「虎と竜、再び!!」その参（前書き）

その3です。

これで1話がおわります。

読んでくれる人!!あと少しで1話が終わりますよ!!頑張って
!!

第1話「虎と竜、再び!!」その参

家に入った後、俺は風呂の準備をするため風呂場へと向かった。

長い時間、外にいたかつらなあ。

大河をさっさと風呂に入れて暖めてやんないと。

昨日、四八の高須流家事術の一つ、高須力ビ殺しバスターを風呂場の力ビどもに決めてやったから今の風呂場は異常にきれいだぜ。

軽く浴槽を洗い、お湯を張る。

お湯を張っている間、同窓会の後片付け。

あれだけみんなが暴れまわっていたので会場であるこの店はひどい有様となっていた。

幸い、窓が割れたり、コップが砕け散ったり、机が割れたり、春田が吊るされたりはしていなかったの
で、後片付けにはそれ程、時間はかからなかった。

後片付けが終わって風呂を見に行くとちょうどお湯がたまつたところだった。

「おい大河。風呂沸かしたぞ。先に入れよ」

……。

「おい大河！大河てば！」

返事がない。

アイツまたコタツで寝てやがるな。

「ったく」

大河はよくコタツでうたた寝をしている。

どうせまた、いつものように寝ているのだろう。

リビングに辿り着くと大河はいつも通りコタツに横たわっていた。

ただいつも通りでないことが二つだけあった。

一つは大河が起きていたこと。

そしてもう一つは大河が苦しんでいたことだ。

「た、大河！お前、大丈夫か！？」

「う・・・あ・・・りゅ、竜児？何か・・・もう・・・来たみ・・・たい」

今にも消えそうな声で大河は言う。

「な、なにが！」

「陣痛」

「は？だって予定日にはまだ一カ月ぐらい早いぞ！ただの腹痛じゃ……」

よく見ると大河はすでに破水していた。

状況はかなりヤバイらしい。

俺が何をすればいいかわからず、あせっていると不意に扉が開いた。

「ん、ん……飲みすぎたあゝ竜ちゃん、お水、って大河ちゃん！？これってまさか破水して…竜ちゃん、早く救急車を！！」

そついうと泰子は大河に応急処置をこなしていく。

その間、俺は全く役に立たなかった。

しばらくしてやってきた救急車に大河は運ばれて行く。

俺と泰子も救急車に乗り込んだ。

大河の手を握る続けることしかできなかった自分の無力さを噛み締めながら……。

十五分後、ようやく病院に到着。

やけに長い廊下を通る。

一体どこまで続くのだろうか。

もしかして永遠と続くのではないか？

その予想は裏切られ、ドアの前で制止する。

「ここから先は立ち入り禁止なのでその椅子にお掛けになってお待ちください。」

医者言葉がやけに冷たい言葉に感じた。

「いやだ。俺も一緒に……」

一緒に、一緒に行かなきゃ。

俺は大河の『夫』なんだ！！

大河が苦しんでる時にのんきに座ってなんていられるか！！！！

だから俺も一緒に……

「竜ちゃん。」

泰子が俺の肩を掴み、俺の進行を阻む。

振り向いて反論しようと口を開くが、

「落ち着きなさい。」

とまた泰子に阻まれる。

その言葉を聞いてようやく頭が冷えた

俺はゆっくりと大河の手を離す。

「よろしく…お願いします。」

今の俺にはこれしか出来ない。

これしか…出来ない。

「最善を尽くします。」

そついうと医者は手術室に消えていった。

何分経っただろうかよくわからない。

落ち着くために缶コーヒーでも買ってくるかと思い、立ちあがった時にちょうど医者が手術室から出てきた。

「産まれたんですか？」

俺は歓喜混じりの声で聞いた。

「それが大変申し上げにくいのですが…奥さんが意識不明の重体でお子さんもまだ出てきておりません。なにぶん破水と出血が多く、しかも奥さんは体が小柄なので出産するまでもつかどうか……なので最悪のケースを考えておいてください」

頭を金槌で殴られた気分だった。

視界が揺れる。

吐き気がする。

天と地がひっくり返った気がした。

同時に俺の中でブチッと何かが切れる音がある。

「ふざけんな！」

気づいたら医者者の胸倉を掴み、壁へ叩きつけていた。

「竜ちゃん。落ち着きなさい。」

泰子が俺の後ろから俺を止めようと声をかけたようだったが、俺の頭はそんな言葉を理解できる状態になかった。

そのまま腕に力を入れる。

「うるせえええ！あんた、医者だろ？だったら何とかしろよ！！そのための医者だろうが！！もし大河とミントになんかあってみろ！

そんなときは……」

ただじゃおかない、と言いかけた時だった。

不意に後ろから強い力で引っ張られた。

そして頬のあたりでバチンツと何かが弾ける音が聞こえた。

最初はなにが起こったか、全くわからなかった。

また俺の中で何かが切れたのだろうか？

いや違う。

泰子が俺にビンタしたのだ。

叩いたことは1度もなかったのに。

「竜ちゃん！あなたがそんなことでどうするの！落ち着きなさい！」

「え？…あ……。」

不意に抱きつかれ、頭を撫でられていた。

昔、泣き虫だった俺によくした行為だ。

「大丈夫、大丈夫だから。大河ちゃんとミントちゃんは絶対に死なない。それとも竜ちゃんは大河ちゃんたちが死ぬと思うの？」

そう…だな。

そうだよな。

柄にもなく熱くなっていたことに気付く。

「ゴメン」

泰子に謝る。

やっぱり泰子はいい母親：スーパーお母さんだ。

泰子の息子で本当によかったよ。

「すいません。取り乱しました」

医者にも頭を深々と下げ、出来るだけの謝罪をした。

「いいんですよ。こんな場面だったら誰でも取り乱しますから……。あなたはとても奥さんを愛していて、いい旦那さんですね。」

「はい」

即答した。

即答できた。

その時の俺にはもう照れなんてものはなかった。

俺の返事を聞くと医者は軽く頭を下げ、また手術室に入っていった。

待つ。ひたすら待つ。

1分が1時間に感じられた。

今、どのくらいたったのだろうか？

果てしなく過ぎて行く時間。

永遠にこのままなのだろうか？

永遠に待ち続けなければならないのだろうか？

永遠にこの苦しみが続くのだろうか？

そういえば何かの小説に『始まりがあるものには全て終わりがある。』とか書いてあったな……。

この苦しみにも終わりが来るのだろうか？

もう俺の精神は限界に達していた。

発狂しそうになった時、不意に『手術中』のランプが消えた。

さっきの医者が出てくる。

俺は期待の眼差しを医者に送った。

しかし医者は黙って首を振った。

最悪の結果となったのだ。

目の前が真っ白になった。

その後の言葉は耳を通るだけで理解は出来なかった。

この日、小さな星は光を失い、逢坂大河あらため高須大河は死んだ。

俺の頬に涙は流れなかった。

第1話「虎と竜、再び!」その参(後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございます。

終わりました、1話。

どうだったでしょうか。

感想とかくれたら嬉しいです。

褒められたらのびる子ですので…(チラッ

あと大河ファンの方、誠にすいませんでした。

第2話「From大河」その壱（前書き）

ども、不幸男です。

2話は2部構成です。

もっとギャグを入れたいですね W W W

第2話「From大河」その壱

気づくと俺は真っ暗な空間の中にいた。

前が見えない。

ここは……何処だろうか？

よくわからない。

どうやってここに来たのか、なぜここに来たのか。

いくら考えても答えは出なかった。

気持ちが悪…。悪い。

吐き気がする。

何故かはわからないがこの空間に長く居たくなかった。

出口を探そう。

そう思って前に踏み出した瞬間、地面の感触がなくなった。

落ちる……！？

瞬間的にそう思って何かにつかまろうと手を伸ばしたが、俺の手は空を切る。

今度こそ落ちる…。

そう思ったがいつまでたっても固い地面は現れない。

それ以前に重力にひっぱられている感じがしない。

無重力の中に居るようだった。

しかし落ちない代わりに体を動かしても前に進まなかった。

どうしようもなく途方に暮れていると突然、目の前に小さな星が現れ、輝き始めた。

小さな星……。

見覚えはあった。

見覚えしかなかった。

忘れもしない。

あれは大河が送ってきた写真の星だ。

自分にそっくりだったから送った、と大河は俺を殴りながら（きつと照れ隠し）教えてくれた。

大河……。

星を眺めていると突然、光が弱くなった。

どんどんしぼんでいく星。

待ってくれ!!

星に手を伸ばすが届くはずもない。

頼む!! 行かないでくれ!!

俺は、俺はお前がいないと……

大河!! 大河!! 大河!!

手で宙をかく。

星に向かって進むために。

でもやっぱり体は前に進まない。

少しでも前に進もうと手足をばたつかせていると、急に息が苦しくなった。

手足の動きが止まる。

瞼が落ちていく。

意識が遠のいていく……。

たい……が……

「あ、やつとパパ起きた！」

目を覚ますとミントが俺の腹の上で胡坐をかいていた。

腹の上に座るな。

苦しい。

•
•
•
•
•
•
○

あれ？

そういえばすごく苦しいぞ？

ミントが乗っただけでここまでするものなのか？

いやそんなはずは…

h?

「……ムグッ！」

喋れねえ
!!!

ていうか息が出来ねえええええ！！！！

それもそのはず、口にはガムテープ、鼻にはお花の形をしたクリップが……

うん、華があっていいね。

などと頭がおかしくなるくらいの酸欠状態に見舞われ、もう一度夢の彼方へフライアウェイしそうになる。

「ンンン！！ンンンンンンン！！（ミント！！早くこれを取れ！！）」

「はいはい」

いや、今のでわかったのかよ。

読心術の心得でもあるのか？

いやいや会得させた覚えがないから。

ミントがクリップを外し、ガムテープを剥ぐ。

「痛っ」

勢いよく剥いだため、髭が抜け、ガムテープの粘着部分が砂場に落した磁石みたいになっていた。

「痛つてえ。……こーら。こんなことしたらダメだろ」

「えゝ、だってこの前、亜美ちゃんが人は息が止まったら起きるって言うてたよ。それで今度、パパで試してみなさいって」

あの野郎。

子供になんてこと教えてんだ。

危うく死にかけたぞ。

折角、続編始まったのにもう終わりとかシャレになんねえ。

「それにうなされてたから起こしてあげたんだよ。褒められてもいくらいなのになんで怒られなきゃいけないの!!」

頬を膨らませ、むくれるミント。

「おお。そりゃ悪かったな。ありがとう、ミント。でも今度からはしちゃダメだぞ。逆に目を覚まさなくなっちゃうかもだからな……」

ミントの頭をくしゃくしゃと撫でる。

ミントの顔はすぐにむくれ顔から満面の笑みに表情をシフトした。

こんな笑顔されたらなんでも許しちゃうよな。

通称人殺しの目を持つ親バカがここにいた。

大河が死んでから5年。

ミントは無事5歳の誕生日を迎えそうであった。

幸い、何の後遺症もなく元気な女の子である。

まあ元気すぎるくらいだが。

顔は大河似で髪は黒のロング。

性格は活動的で攻撃的。

……誰に似たんだか。

そして残念なことに……睨んだ時の目は俺、そっくりだった。

睨んだだけで人を殺せそうな……

あれ？これ俺よりひどくないか？

「パパ、あーさーごーはーん！」

「わかった、わかった。だから俺にぶら下がるのをやめろ」

もちろん俺の言うことを聞くはずもなくミントはそのまま俺の首にぶら下がっていた。

昨日見た動物特集番組に出ていたコアラの親子のようだった。

決してナマケモノではない。

愛らしいコアラの方だ。

まあコアラも結構、獰猛らしいが。

俺は……まだ涙を流していない。

お通夜るときも葬式るときも火葬るときも納骨るときも……。

俺の時間はあのに止まったままだった。

大河の部屋も櫛枝や川嶋が時々掃除に来るくらいで、ほとんどそのままで保管してある。

全く何も変わらないままだった。

部屋も俺も。

あれから変わったこともある。

川嶋が店に通うようになった。

少ししゃべって酒を飲むだけだがそれだけで心が楽になった。

川嶋も俺も。

ミントを首から振り落とし、台所に立つ。

コアラごっこはここまでだ。

そういえば昔、雑誌に「台所に立つ男はモテる」と書いてあるのを見た時は柄にもなくテンションが上がってしまったのを覚えている。

もちろんこれは嘘っぱちであり、毎日台所に立っている俺は全くモテなかった。

何が悪かったんだろうか……

そんなどうしようもない悲しい事実を再認識しながら朝食を完成させる。

本日の朝食はハムエッグ。

正にThe朝の洋食。

これに食パンとコーンスープが付いたら完璧だったな。

「ほーらミント。ハムエッグ出来たぞ。」

「うわぁ！ハムエッグ、ハムエッグ、ハムエッグ！」

無駄に喜ぶミント。

それを見て喜ぶ俺。

白状すると俺は典型的な親バカである。

見ていてわかるほどの親バカである。

そしてハムエッグでテンションあがったのはわかるが、買ったばかりの新品机にナイフとフォークを突き立てるのをやめてくれ…

「熱いから気を付けろゝて、あ、でも急いで食べるよ！幼稚園遅れちまう！」

時計を見ると針はいつもの時間より10分も早い時間を刻んでいた。というか普通にピンチ。

「それは私のせいじゃないもん！」

愛娘に痛いところつかれる父親がそこにはいた。

俺は櫛枝との約束通りに櫛枝が勤めている幼稚園にミントを入園させた。

現在通称みのりん先生が我が愛娘の担任である。

櫛枝には俺が店でミントをどうしても見ることが出来ない時、遊んでもらったりしている。

時々店の方も手伝ってくれているので正直、申し訳ない気持ちでいっぱいなのだが、快く引き受けてくれるのでいつも甘えてしまっている。

今度、お礼にオレンジのケーキでも作ってプレゼントしようか……
未だに起きてこない泰子の分の朝食にラップをかけている時、非常に重要なことを思い出した。

「……ってインコちゃんにご飯をあげてねえ」

家族の一員であるインコちゃんにご飯をあげるのを忘れるとは……

「おーいインコちゃん。ご飯ですよー。」

我が家のインコちゃんはまだまだ健在だった。

やっぱりインコも喋らないよりは喋っていた方が長生きするようだ。

春田が毎日欠かさずインコちゃんと喋っていたおかげかな。

余計な言葉を覚えなきゃいいが。

この前インコちゃんが「ツンデレオツ！ツンデレオツ！」と言いだした時は発狂してしまった。

インコちゃんの未来が心配だ。

まあどう転んでもクリスマスの我が家の食卓には並ばないから安心してくれ、インコちゃん。

「パパ〜遅い〜！」

これまた誰に似たんだか知らないが食べる量とスピードが半端じゃない。

ってちよつと待て俺の分まで食ってるじゃねえか。

俺のハムエッグ……。

「うおおおおおお！」

只今チャリで爆走中。

もちろんすれ違う人、すれ違う人に奇異の目を向けられたが気にしない。

途中、誘拐と間違えられて警官に追いかけられたが気にしない。

小さいことは気にするな！！！！

めげるな俺！！！！

トンボも真っ青になるくらいの速さでペダルをこぎ続ける。

俺も自転車にプロペラをつければ空くらい飛べるかもしれないな。

というか、これくらいいけば鳥人間コンテストも夢じゃない。

いいね！いい人生だよ！

「キャハー！いつもよりはやいー！」

後ろでのんきに笑うミント。

遅刻寸前でよく笑っていられるな。

……鳥人間コンテストとか考えてた俺が言えることじゃないか。

そしてようやく幼稚園到着。

「おお！高須くんにミントちゃんではないか。おっはよー！いつもより遅めだね？」

「おはよー。みのりん先生！だって今日、パパがねぼーしたんだもん」

それを言ってくれるな、我が娘。

「おーおーそれはいけないいぜ高須くん。早起きは三文の得だよ？三人寄れば文殊の知恵だよ？」

おう。

遅く起きたら朝御飯なくなっちまったよ。

俺のハムエッグ……。

あと三人寄れば文殊の知恵は意味違うからな。

三人集まっても早起きは出来ないからな。

「おう。今日はちょっと嫌な夢、見ちまってな」

本当に……

ただの悪夢。

「そうだったのか！ならばこの不肖、みのりん先生がカウンセリングしてあげよう！」

そう言つて櫛枝は腕や手、指をそれはもう気持ち悪いくらいにウネウネと動かした。

何だ、その踊り……

ペテン師にしか見えないぞ。

それとも俺のMPでも下げようとしているのだろうか。

「お、おう。機会があつたら今度な。それじゃあミントを頼む」

「うむうむ。それではミントちゃんは任せて、高須くんはしっかりと働いてきなさい」

夢に出てきそうな踊りをやめ、自らの職務に戻る櫛枝。

今日も悪夢決定だな。

「ミントゥー！ちゃんと先生のいうこと聞くんだぞ」

「わかったから早く行ってよ！！もう！！」

怒られてしまった。

愛娘に怒られて若干へこむ俺。

若干は嘘です。

本気でへこみました。

第2話「From大河」その壱（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

ギャグパート終了です。

次はシリアスパートです。

ううむ、文章力がほしい。

第2話「From大河」その弐（前書き）

その2です。

2話終わっちゃいますね。

んーもっと頑張らなくては！！

第2話「From大河」その弐

その日の夜、突然川嶋と櫛枝が訪ねてきた。

「おう。どうした、お前ら？」

居間から店の方へ出て迎える俺。

「うん、ちょっとね。それより高須くん。ミントちゃんは何処に？」

「ああ、ミントなら居間でTV見てるぞ」

俺の言葉を聞いた瞬間に走り出す櫛枝。

家の中を猛ダッシュ。

もうそれは世界一有名な配管工がするダッシュのそれだった。

でもここ一応飲食店だからな。

しばらくしてミントの悲鳴と笑い声が聞こえてきた。

何が起こったか、大体予想できる。

櫛枝が後ろから脅かしてくすぐりでもしたのだらう。

「高須くん。」

急に川嶋が話しかけてきた。

現在、店の中には俺と川嶋しかいないので話しかけてくるのは当然だろう。

だが俺はあんまり川嶋と会話したくなかった。

何を言われるか予想できるからだ。

俺は沈黙で会話する気がないことを伝える。

「明日、……でしょ？でも明日はどうしても撮影抜けなさそうだったから今日あいつとお参りに行ってきたの。今はその帰り」

俺の沈黙に構わず続ける。

「だから明日はミントちゃんと二人でお参りいつてね。」

心臓が大きく高鳴る。

同時に胸のあたりがギュツと締め付けられるように痛くなった。

それでも俺は声を発さない。

川嶋もわかっているのだ。

だから俺の返答を待たず続ける。

「高須くん、タイガーのこと、ミントちゃんに喋ったことないですよ?」

タイガー。

川嶋が大河を呼ぶときに使うあだ名。

もう締め付けるといふ表現では足りないほどに胸が痛い。

「この前私に聞いてきたのよ。『ママってどういう人だったの?』って。それでパパに聞いたことないの?」って聞いたらなんて言っただろう?」

「……なんて、言ったんだ?」

自然に聞いてしまった。

あっけなく沈黙を破ってしまったことを悔やみながらも川嶋の言葉に耳を傾ける。

「『パパはママの話、してほしくないみたいだからパパには聞けないの』って。高須くん、娘にまで気を使われてるんだよ?どこまでわかりやすいのよ……」

「そんなに、わかりやすいか、俺」

「何言ってるのよ。わかりやすいに決まってるじゃない。一目瞭然

よ。何しても、心ここに非ずみたいな感じじゃないの」

心ここに非ず、か。

たしかにあの日から俺は何かを感じる心をなくしてしまったのかも
しれない。

俺は本当の意味で笑ったり、感動したりしていなかった。

そんな俺が涙など流せるわけもない。

今の俺が持っているのは虚無感だけだった。

そんな奴が迷惑かけずに生きていけるわけがない。

俺は知らず知らずのうちにいろんな人に迷惑かけ、気を遣わせてき
たのだ。

最低だな、俺。

「ゴメン、川嶋。お前にもたくさん迷惑かけてるよな」

「別にいいわよ。だって私達、対当の存在でしょ？」

「俺よりちょっと前を進んでるんじゃないのかよ」

思わず笑みをこぼす俺。

「う、うるさいわね。いちいち細かいのよ、高須くんは！」

頬を膨らませそつぱを向く川嶋。

「はは、悪かったな」

しばらくの沈黙の後、

「……ありがとう。川嶋」

川嶋の気持ちに素直に感謝した。

今なら涙を流せるかもしれないと思ってしばらく待ったが俺の頬は
渴れたままであった。

次の日、俺とミントは大河の墓に行った。

電車の中では会話がなく、外では小雨が降っている。

墓参りに行く時はいつも会話がない。

確かにミントにも気を遣わせてしまっていたようだ。

ごめんな、ミント。

電車がブレーキをかける。

目的の駅に到着したのだ。

何も考えない。
何も感じない。
何も流れない。

機械のようにおりる準備を整えていく。

駅を出る頃には小雨は止み、雨上がり特有のモヤモヤとした湿気が俺とミントを襲った。

不意に昔のくせで前髪をいじる。

この癖をやめたのはいつだったろうか？

駅から5分歩いたところに大河の墓はあった。

大河の墓の前で立ち尽くす。

やはり涙は流れない。

ここに立てば今度は流れると思ったのに。

「パパ…私、何をすればいい？」

俺の袖を引っ張りながらミントは不安そうな顔で尋ねてくる。

この日初めてミントが発した言葉だった。

「そう…だな。じゃあこのバケツに水をくんできてくれ」

ミントは静かに頷き水道がある場所を探しにいった。

「大河……」

妻の名前を口に出す。

しかし俺の頬は濡れたままだった。

諦めてとりあえず線香を探す。

確か川嶋が線香はまだ残っているって言ってたな。

「な、あいつらちゃんと整理して行けよ」

墓の横についている石箱を開けると中で線香がバラバラに散らばっていた。

「あーもう！我慢できねええ！」

これが悲しい主夫のさがなのだろうか？

などと思いながら線香を片付けていたらその中に小さな便箋を見つけた。

去年来た時にはなかったはず。

川嶋たちが置いていったのだろうか？

手にとってみたら宛先は高須竜児様になっている。

どこかで見たことのある筆跡だった。

裏にはFrom大河と書いてある。

頭を金棒で殴られたかと思った。

それほどの衝撃が体を駆け巡る。

そう。それは散々みてきた大河の字であった。

手紙には中身はしっかりと入っていた。

今度はちゃんと入れれたらしい。

北村の時みたいに入っていないかと思ったぞ。

少しは成長したんだな。

中にはこう書いてあった。

竜児へ

結婚5周年おめでとう！

今は3人家族だけでもうすぐ4人家族ね。

まあミントの目がアンタに似てないことを祈るわ。

ああ考えただけでもおぞましい。

結婚するまで竜児とは色々なことがあったわよね。

ラブレターの入れ間違えから私たちは始まった。

北村くんへの告白、

ばかりとの水泳勝負、

ばかりの別荘、

完全優勝した文化祭、

私が自分の気持ちに気付いた聖夜祭、

竜児が私の気持ちに気付いた修学旅行、

二人の気持ちが繋がったバレンタイン、

二人で逃げようと誓った駆け落ち、

竜児との初めてのキス……。

私の胸にはあげだしたらきりが無い程の思い出があふれている。

つらいこともたくさんあった。

でも今は全部いい思い出だったと思っているわ。

その思い出の中心にはいつも……竜児、あなたがいた。

あなたのせいで傷付いたこともあった。

でも楽しい思い出の中にも必ず竜児がいる。

竜児が全部楽しい思い出にかえてくれる。

だからこれから一緒にたくさんの楽しい思い出を……

いや、やっちゃんと私と竜児とこれから生まれてくるミント、全員でこれから楽しい思い出をたくさん、たくさん作っていきましょう。

それ以外、私は何も望まない。

だから……

だからね。
竜児。

これからもずっと……ずーと私の駄犬でいなさい。

高須大河より。

P S . 読んだらこの手紙はすぐに捨てなさい。絶対だからね。
でないと殺すわよ。

「パパ……泣いてる？」

いつの間にか水を汲んで戻ってきたミントが俺を見上げている。

俺は不意に話かけられてかなり驚いた。

いや正しくはその発せられた言葉通り、涙を流していたことに驚いた。

ぼろぼろと頬を流れ落ちる涙はそのまま川にでもなるか、という勢いだった。

虚無感風船から出ていく空気のように俺の心の中から消えてしまっていた。

そのかわり悲しみが俺の心を満たす。

大河が思い描いていた未来は永遠に失われてしまった。

そう考えるだけで凄く悲しい。

胸の上に漬物石でも乗つけられたかのような。

「パパ、大丈夫？」

ミントが俺の袖を引っ張る。

俺はそのままミントを強く抱きしめた。

「パパ……どうしたの？どこかいたいなの？」

そつだよ。とつても心が痛いんだ。

「しばらくこのままで……いてくれないか？そしたらパパ、泣きやむからさ。ほんのちよつとだけ……このままで……」

そついつた俺に従つてミントはそのまま抱きしめられていた。

こんなに泣くなんて思つてもみなかった。

こんなんじゃ父親失格だ。

しばらく泣いて5年間、貯めこんだ感情を一気に吐き出した後、大河に線香をあげた。

墓の前で手を合わせて静かに目を閉じる。

大河……

ごめんな、

今までお前の死と向き合えなくつて。

それで多くの人に気を遣わせちゃった。

でもこれからはちゃんとするよ。

絶対ちゃんとする。

だからこれからミントにお前の事、少しずつ話していっていいと思うんだ。

最初はお前の話をするたびに泣くかもしれない。

いやきつと泣くだろう。

でも少しずつ、

少しずつ、ちゃんと伝えていくよ。

お前の事。

そつだな、最初はお前がすげえドジだったってことから伝えるよ。

ラブレターを入れ忘れたとか塩と砂糖を間違ったとか、そんなこと。

お前のドジ伝説なんてありすぎて一生喋っても伝えきれないかもしれないけど…

ちゃんと伝える。

一生かかっても必ず伝える。

だから安心してくれよ、大河。

俺はもう……大丈夫だ。

そつ大河に伝えて俺は目を開けた。

「帰ろうか、ミント」

ミントにそつと手を差し出す。

「うん」

ミントは俺の手をそつと握る。

そして俺たちは互いに身を寄せ合い、帰路についた。

次の日、店にやってきた櫛枝と川嶋に手紙の真相を聞いてみた。

実はこの手紙、この前川嶋たちが大河の部屋を掃除していた時に見つけたそうだ。

手紙はタンスの奥深くに封印してあったのだと櫛枝は言う。

それでどうやって渡すか川嶋と相談した結果、これは俺自身が見つけないといけないという結論になったらしい。

それでわざわざ嘘までついて前日に墓参りに行き、手紙を仕掛けたというわけだ。

本当に遠回しな二人だよな。

でもとても感謝している。

大河の死と向き合うことが出来たし、

ミントのためにこれから頑張ろうって決心できた。

大河……これから一緒に思い出を作っていくことはできなくなったけど、絶対俺がミントを幸せにする。

そんでもって俺も幸せになる。

だから……。

だからな。
大河。

これからも俺たちをずっと
ずっと見守ってくれよな。

第2話「From大河」その弐（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

なんか最終回っぽくなっちゃいましたが終わリませぬよ？
これからも頑張っていきましょう！！

第3話「バースデープレゼント」その巻（前書き）

3話その巻です

3話も2部構成です。

泰子の無邪気な姿に注目。

第3話「バースデープレゼント」その巻

墓参りの次の日。

午前中はミントと一緒に大河の部屋を片付けていた。

でてくる、でてくるゴミ、服、雑誌類、思い出の品、涙、鼻水。

最後から二つは聞かなかったことにしてくれ。

大河の衣服類はほとんどミントのためにとっておくことにした。

大河のサイズはご存じのとおりとても小さいのでミントもすぐに着られるようになるだろう。

部屋の片づけも一通り終わり、午後開催されるミントのドキドキプレゼント選びに向けて昼食をとる。

「ミント、なんでそのマフラーにこだわるんだ？そのマフラーはもうゴワゴワだからあんまり手触りよくないだろう？」

部屋の掃除中、ミントが大河の持ち物で特に気に入ったのは俺が大河にあげたマフラーと大河愛用の木刀だった。

正直、木刀を手に取った時の笑顔を見た時、血って怖いな、と実感してしまった。

もちろんそんなものを部屋から持ち出させるわけにはいかなかったので置いてこさせたが。

「うん。でもこれがいいの。なんだかいにおいがするし、落ち着くから…」

「あー、多分それママの匂いだな。よくつけてたし」

しかも鼻水ついたとか言ってたし。

「これが、ママの…匂い？」

巻いているマフラーに顔を埋めるミント。

ああその格好よく大河がしてたな…。

その姿を見ていると、急に視界が悪くなった。

「あつ。ちょっと俺トイレ…」

「食事中なのにー！もう！」

しょうがないだろ。

顔をうずめる姿があまりにも大河に似てるもんだから…。

顔を洗い涙を拭いて洗面所を出るとちょうど泰子が起きてきたところだった。

「りゅーちゃん、お腹へったあー」

いくつになっても子供のようにである。

まるで大供だ。

ちなみに今年で44歳。

本家大供さんは39+1歳だったか。

「今日は泰子の好きなオムライスだぞ。」

「名前は？」

鼻息荒く尋ねてくる泰子。

どんだけオムライスの名前に執着してんだよ。

前は書いてなかったただで大泣きしてたし…

「書いてるよ」

もちろん前のように泣かれては困るのでしつかりと赤い文字で『やつちゃん』と書いておいたのだった。

そういえば赤字で名前書いたら呪いがかかるとかなんとかっていう都市伝説があったな。

ケチャップはセーフなのだろうか？

「わーい！ありがとー竜ちゃん！」

俺にお礼を述べると、ものすごいスピードで走り去る泰子。

廊下は走るなよ！

…って、俺は泰子の先生かよ。

と俺は冷静に自分へツツコミを入れてしまった。

俺はこんなかわいそうな奴だったか？

昼食後、俺たちは昨日すっかり忘れていたミントのバースデープレゼント（あの後、服がほしいといったので服に決定）を買いに町へと出かけた。

「遅い」

時計台の前から人気女優とは到底、思えないほどの形相でこちらをにらんでくる女性が一人。

もちろん知り合いに女優なんて一人しかいない。

時計台の前にいた元人間、現鬼にとりあえず謝ることにした。

「ゴメン、川嶋。あとでアイスおごるからとりあえずここは許してくれ。」

「女優にアイスおごるって…どんな神経してんのよ、あんた。…もらうけど。」

もらうのかよ。

案外ちよろい人気女優だった。

心のバリケードが小学生低学年レベルだ。

川嶋、知らない人がアイスくれるって言ってきたもついでにっただめだぞ。

「なによ。人をかわいそうな奴を見るような目で見て…。私、食べてもおもしろくないわよ」

「食うか！人をなんだと思っていやがる！！」

「異常性癖者」

即答だった。

ひどいいわれようだな、おい。

「亜美ちゃん！」

ミントが川嶋に猫撫で声で近付き抱きついた。

「おー。ミントちゃん、今日は何の服、買おうか？」

今日、川嶋に来てもらったのはもちろんデートとかそういう浮ついた思いからではなく、ミントの服を選んでもらったためである。

何を隠そうミントの服はいつもの川島コーディネートだ！

ゴメンな、ミント。

女の子の服とかわからねえ…。

それにこの前、女の子の洋服売り場にいたら通報されたからな…。

どいつもこいつも俺を異常性癖者扱いしやがって…

まあ川嶋と一緒になら通報なんてことにはならないだろう。

「今日はね、今日はね！帽子とワンピースとズボンと手袋と靴下と靴と…」

俺にはほとんど呪文にしか聞こえないようなスピードで数々の商品をあげていった。

それはもう遠慮なしに…

その呪文のせいで俺は胃がキリキリなるぞ。

これ以上俺の胃にバギクロスをかけないでくれ…

「まてまてまてまて！ウチを破産させるきか！？」

「別にいいじゃない。愛娘のためよ？お金だつて使われて本望なはずよ、ねーミントちゃん！」

「ねー！」

ねー、ておい。

意気投合してんじゃねえよ。

ウチはびんぼーなんだよ！

お前みたいな売れっ子女優とは違ってな！！

「無理に決まってるだろ。嫌だぞ、俺は。ずっと三食パンの耳だけとか…いや工夫すれば…無理だな」

「じゃ、決まりね。取り合えず服は…3階ね。」

「3階へレッツゴー！」

サクサクと進んでいく川嶋とミント。

「てか俺の話をきけえええ！」

心の中で愛娘にへそくりの全額使うことを覚悟した父親がここにいた。

第3話「バースデープレゼント」その壱（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

川嶋さん、アイスとか食べちゃっていいんですね？

脇腹とか腕とか…あ、はいすいませんでしたごめんなさい許してください。

第3話「バースデープレゼント」その弐（前書き）

3話のその弐です。

子供の可愛さを頑張ってたしたいですねー

第3話「バースデープレゼント」その貳

川嶋とミントを追ってエスカレーターで3階に直行する。

その途中で見事、北村一家にでくわした。

実は北村一家とここで待ち合わせしていたのである。

…嘘である。

全くの偶然です。

会長（今はPTA会長）がこちらに気づき、

「おお。高須じゃないか。何をやってるんだ？」

と声をかけてきた。

やべえ絡まれた…。

「い、いやちょっとミントに誕生日プレゼントを、と思いまして…」

やっぱ会長としゃべんのは緊張するな…

「それならば一緒に見てまわろうじゃないか。ここであつたが百年目だ！」

会長に続いて北村もこちらに気づく。

こうなつたらもう逃げられない。

まあ会長に見つかった時から逃げられないのは決まつてたが…

「北村、それって大抵、敵キャラが言うセリフじゃないか？しかも十中八九負けるヤツの」

やられ役ともいう。

「ハハハハ！そうともいうな！」

今日もテンション高いな。コイツ。

へそくり全額パーという絶望を味わいそうな俺にはとても頭に響く
テンションだ

でもそこが北村のいいところだもんな。

「おい高須。あんなところに試食コーナーが！ちょうど腹が減った
ところだったんだ！行こう行こう！」

前言撤回。

少しだまれ。

いい歳こいて試食コーナーを漁るな！！！！

試食するために何周も回ってれば、『あ、同じ人だ』ってなるに決
まってるだろうが！！

そんなこともわからずにそれを行っていいのは小学生までだ！！

「そして俺を引っ張るなああああ！！」

あと1階で服の階に行けるのに…。

万事休すか！？

俺が一生懸命、北村を振り切っている間に会長の足元から子供が二
人顔をだした。

一人は男の子、もう一人は女の子だった。

「はあ。なんでコイツとまわんなきゃなんだよ…」

男の子の方が溜息交じりに愚痴をこぼす。

この子が会長と北村の双子、その一人。

名前は北村蓮。きたむられん

何かとよくミントと張り合う負けず嫌いな男の子だ。

「うるさい！このバカ蓮があ！」

それに対して負けず嫌いな我が娘も負けていない。

「ニヤハハハ！今日も仲が良いねえ。つばきちゃん開心感心カンシンだよ」

女の子の方が高らかに笑う。

この子が双子の片割れ。

名前は北村椿。きたむらつばき

北村をそのまま女の子にしたような感じの子。

テンションだけはいつでも高く、言ってることが時々よくわからない。

蓮とミントの喧嘩がヒートアップしてくると大体この子が止めている。

いわゆる仲裁役。

ようやく北村を振り切ると蓮とミントが言い争っていた。

それを椿が仲裁している。

子供たちは相変わらずだなー…

「そういえば高須」

唐突に会長が話しかけてきた。

ようやく北村を振り切ったのに次はあなたですか、会長。

もう、やめてくださいよ。

あなたが唐突に話しかけてくるたびにこっちは寿命が1年ずつ縮ま
ってるように感じるんですから。

などとは口が裂けても言えない。

もし言おうもんなら「おい、剣道部。竹刀を持ってこい。」となっ
て教室乱闘パーティーが始まっちゃう。

「今度の運動会、お前は保護者の競技でるのか？」

「え？」

俺の全く知らなかった情報が会長の口から発せられた。

「そーだぞ！高須！リレーだぞ！」

そんなに拳を握って力説されても…

「それって…いつあんだ？」

俺は内心、かなり動揺していた。

なんてベタな言葉が似合うほど動揺していた。

いや、本当に…。

すごく嫌な予感がするんだが…

「ん？1週間ぐらい前に園からお知らせのプリントがいつてるはず
だろ？」

そんなプリントは貰った記憶がない。

つーことは…

「ミーントー！」

「バレたか！」

「バレたか、じゃない！」

つたくよー。

誰に似たんだか。

そんなとこまで似なくていいのに…

……。

まさかな……

「ミント、まさかとは思うがそのプリントで紙飛行機作って窓から飛ばさなかったか？」

「まさか見てたの!？」

完全に血をうけついでやがんな。

どこまで似てるんだよ。

「まあ俺のほうか飛んでたけどな！」

蓮が誇らしげな顔で言い張る。

「いやあゝ私が一番だったでしょ！」

それに負けじと椿も張り合った。

しかしそんな告白を聞いて会長が許すはずもなく…

「お前ら…やっぱり飛ばしてやがったな！」

「ヤバー！」

次の瞬間、会長の手から目にも止まらない速さでチョップが繰り出されていた。

「いったーい！」

さすが双子。

全く同じタイミングで痛がる。

双子は片方がダメージを喰らうともう片方もダメージを喰らうって言うのは本当だったのか。

まあ会長は両方攻撃したけど…

「ったく、どおりで折り目が付いてるわ、砂まみれだわの散々な状態で…しかも椿しか持って帰ってこなかったわけだ」

やれやれと溜息をはく。

「それはそうと高須、今日は亜美とデートなのか？」

「違う違う。だから今日はミントの誕生日プレゼントを買いに来たんだって。川嶋とデートなわけないだろ」

デートだなんてそんなこと言われたら川嶋も怒るだろう。

それに人気女優とデートなんてしたらきつとファンの人に殺されちゃう。

「そこまで否定しなくてもいいじゃん…」

「ん？なんかいったか？川島。」

「別に…聞こえなかったんらしい。」

ん？

なぜか川島は急に不機嫌になった。

なんでだ？カルシウム不足？

ああ、ずっとほっとかれたからか。

後でアイスたくさんおごつてやらなきゃ後が怖いぞ。

「では高須に亜美、それとミントちゃん！さらばだ！ハハハハ。」

どでかい笑い声を発しながら去っていく北村。

結局一緒に回らないのかよ。

まあ別にがっかりしてるわけじゃないけど…

…少し嫌がりすぎたかな？

試食ぐらいしてやればよかったか…。

そのあとたつぷりアイスと服を買って、くたくたになりながらも俺たちは帰宅した。

へそくりがゼロになったことは言うまでもない。

でもまあ、ミントが喜んでるからそれでよしとするか。

「パパ、プリントのこと、怒ってる?」

居間でくつろいでいる時、ミントが恐る恐る尋ねてきた。

実はちょっと気にしてたのか…?

「いや。ママもな、昔、そんなやって窓からプリントで作った紙飛行機飛ばしたことがあるんだ」

「へー。ママが…」

「それすごく大事なプリントだったんだけどそんなの知らねー、て感じで…」

これをきっかけにそのあとたくさん大河の事を話した。

俺たちがどんな風に出会い、どんな風に笑い、どんなふうに泣いたか。

たくさん思い出を思い出すたび少し胸は痛むけど俺はもう大河から目をそらしたりはしない。

俺の声はまだ震えていたが、もう涙はながれなかった。

第3話「バースデープレゼント」その弐（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

今回はついに運動会…ついに、でもないけど

何が楽しみかというと竜児のお弁当が楽しみですな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6350x/>

続とらドラ！

2011年10月23日03時08分発行